

インド留学記

その3

日本人の インド理解の盲点



司 司 嘱 研 研 方 方 俊 保 東

寮の朝の生活

私のいたジュビリーホールは、インド人学生の憧れの寮である、と後に友人から聞いた。デリーユニバーサルカレッジからなりたっている。生徒数は十二万とかいつていたが、インド全国から集まる秀才にとつては、大学に入るより遙かにこの寮に入ることは難しい。聞くところに依れば千倍近い競争率であるとか。なぜなら、デリーユニバーサルカレッジは日本の東大のよ

うなもので、インドの文科系の偉い役人や学者外交官は殆ど、このデリーユニバーサルカレッジからなりたっている。生徒数は十二万とかいつていたが、印度全国から集まる秀才にとつては、所に入つてしまつた私は、大いに驚いた。回りの者の殆どが、将来は大統領だとアフリカ大使とかをめざす、青雲の志を持つた者ばかりであつた。二〇〇室ほどの寮に三五〇人程が寝起

きしており、すべて将来のインドを背負つて立
とうという意気込みに溢れる学生ばかりであつ
た。

ところが如何であろう。私はなりもの入りで
入つてみたが彼ら程の志は持ち合わせていなか
つた。加えて、インド学生にとつては、宗教な



んぞやつて何が面白いのかと不思議がられるしまつである。ここでも日本同様哲学とか宗教をやろうなんて学生は、変わり種なのである。

しかし、友達はすぐにできた。インド人は一般的に、はにかみ屋が多くて中々親しくはなれないのだが、やはり同じ釜の飯ならぬカレーを食べて、四六時中顔を付き合わせていると、自然に友情も湧いてこようというものだ。

わたしが最初に友達になつたのは、日本からの習慣で早起きのためまだ開かぬ食堂の扉の前で、度々顔を合わせた東インド出身サフー（日本風に云えば富夫くんである）君であつた。彼は口髭を蓄えた小柄な目の大きい青年でその後随分世話になつた、最高の友達の一人である。

彼はバラモン出身ではなかつたが、宗教色に溢れた中々古風な生活をしていた。そのくせ学んでいる分野はバイオテクノロジーなどという最先端のものである。

かれの生活で、感心したことの一つに毎朝冷水を浴びて後、顔や歯は勿論だが舌を丁寧に洗うことである。Uの字型に曲がったヘラ状のもので丁寧というよりしゃにむに擦るのである。

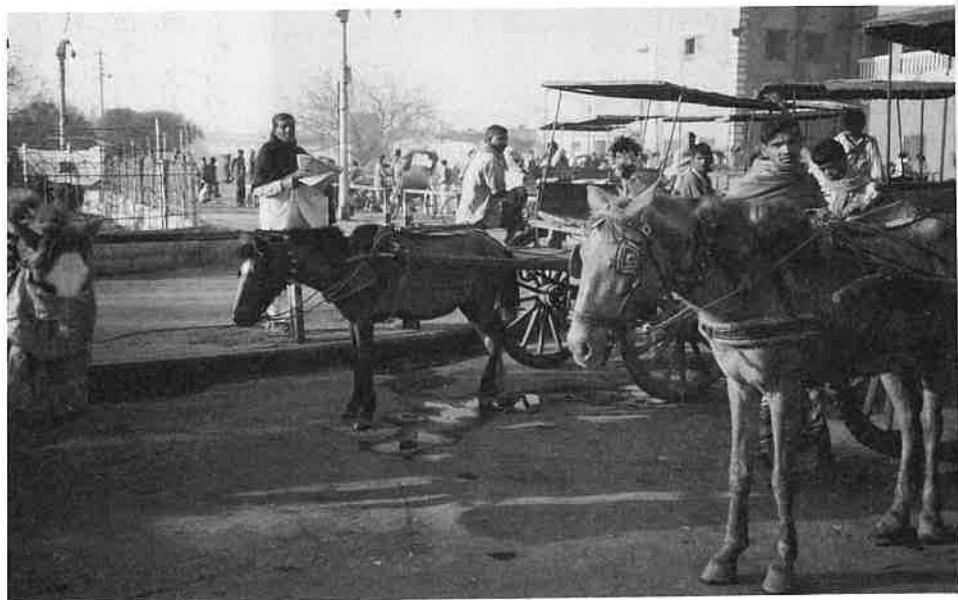
「なんでそんなとこまであらうのか」と聞いたところ（身体の隅々まで洗うのが、朝の仕事であるから当然さ、おまえもしてみろよ、気もち



いいよ」とのことであつた。そして「インド人は甘いものを沢山食べるけど比較的虫歯が少ないのは、この舌を清潔にしているからなんだよ」と言つていた。確かに言われてみるとそのとうりである、ということで私も継ぐ日から一緒に、洗うことにした。やつてみると確かに気持ちもよく、朝起きた時の口の中の不快感が無くなり、さすがインドの文化は凄いと感心させられた、もつとも、この舌洗い、インドにおいてもあり一般的ではないようだ。しかし、これおかげで今まで遠巻きに眺めていた連中とも仲よくなれた。

朝食後の仕事

食事が終わると新聞を読む。大体のインド学生にとって、新聞は単なる情報源なのではない。新聞の隅から隅まで丹念に読み英語力に磨きを



かけたり、公務員試験の勉強の準備をしたりで二～三時間じっくり読む。考えて見れば、新聞をじっくり読めばちょっとした本一冊分に当たる分量なのだから、実に合理的ともいえる。もつとも、殆どの人間が同じ情報源なので話してもすぐさま解ってしまうことも多かつたが。そして、この新聞は、くず屋さんに引き取られ、そこでお菓子や果物の袋になる。実際に無駄のない新聞利用法である。

九時頃になると、ドウビーといわれる洗濯屋が洗い物を取りにくる。これが、実際に親切心旺盛のおじさんで着ているものまで持つていってしまう。お陰でいつも糊のきいた目の覚めるように白いインンド服でいつも快適だった。加えて大変安くて申し訳ないような気もした。もつとも時々ひとの下着まで混ざっていたりで、大雜把ではあった。洗濯も居ながらにして出来るわけであるが、さらに掃除も寮のおじさんたち

が朝やつてくれる。したがつて何にもしなくてもいいのである。ただ、私は勉強だけしていればよい。極楽だと始めは嬉しかつたが、やがてカースト制度の悲惨さが見え隠れしだして悲しくなってきた。



